は御出身地の方々も、ともぐ深い哀しみに、打ち拉がれておられることと存じます。

私ども大学経営者は、先生の御期待に十分に果しえなかった点を反省し、さらにより良い大学へ発展すべく、満身の努力を傾ける所存であります。謹んで御霊前にお誓いいたします。

前田先生!! どうぞ安らかにお眠りください。

昭和五十九年三月二十九日

（副学長　阿部肇一代読）

弔　辞

在校生代表　森　良一

前田先生、今日このような形で御別れを述べなければならなくなったことを、大変悲しく思います。中国の御旅行の折、御身体の調子を崩されましたが、最近つとに御元気になられ、つい先日の卒業式の席上でも、大変御元気な御姿を拝見し、安心しておりました。

私どもが東洋史学の門を叩き、まだ日も浅い頃、先生の「東洋史概説」の御講議に接して、東洋史という学問の深さと偉大さを、十分に知ることができました。

思い出されますが、先生の御講議は、遊牧民の国家の所になられますと、一段と熱が入り、黒板が真白になっておりましたのが、印象深く心に残っております。あるいは漢文講読の時間など、私たちのおぼつかない読み下し文に対し、独自の名調子で御親切に指導してくださいました。その時におっしゃった言葉に、「漢文は外国語であるから常に辞書を引きなさい」とい

うものがありました。いま、漢文を読むたびにこの先生のお言葉が思い出されます。それらのことが、一つ一つスライドを見るように、私どもの脳裏をよぎり、かぎりない思い出となっております。

「一人の一生は短い」といわれますが先生の一生もけつして長いものではありませんでした。まだまだ私たち後輩の御指導をしていただき、東洋史学の発展に力を貸していただけるとばかり思っていましたのにと、いまは残念でなりません。

しかし先生が東洋史学に残された足跡は、永久不滅のものであり、日とともにその輝きを増してゆくに違いありません。そして一人の歴史学者として、その名を歴史にとどめることでありましょう。また先生の肉体は、滅びようとも、我々の心の中で永久に輝き続け、先生の御志に恥じないように、力をあわせて、先生の開かれた道を守り、切り開いてゆきたいと思います。

長い間の教師生活、まことに御苦労さまでした。安らかにお眠りください。在校生を代表して御冥福を御祈りいたします。

昭和五十九年三月二十九日